

令和4年度「全国学力・学習状況調査」

茨城町の状況について 茨城町教育委員会

1 調査の対象

小学校第6学年の全児童と中学校第3学年の全生徒を対象にして、令和4年4月19日(火)に実施されました。

2 調査の内容

- 教科に関する調査(国語、算数・数学、理科)
 - 知識及び技能、それらを活用する力を問う問題が一体化された調査です。
- 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査
 - 「学習意欲・学習方法・学習環境・生活の諸側面等」に関する調査です。



3 調査の結果と考察

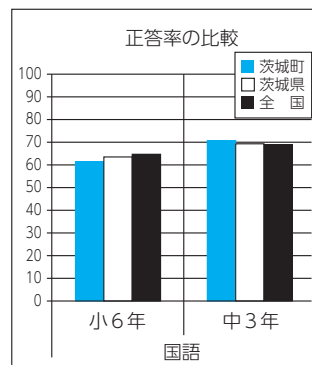
(1) 教科に関する調査

国語(受験者数:小学校233名 中学校261名)

○ 小学校について

県平均、全国平均をともにやや下回る結果となりました。中でも、書くことに関する問題の正答率が低く、これは、茨城県全体の課題と一致しています。問題文の条件を的確に把握した上で、自分が考えた事柄を論理的に記述する力を定着させることが重要となります。また、一文が長くなることで主語にねじれが生じたり、文どうしの接続関係が整わなくなったりしないよう、文を簡潔に書くことや接続語を適切に用いて書くことを心がける姿勢も大切です。そのために、与えられた文章から中心となる語や文を見付けて要約する活動や、自分の考えの理由や根拠を明確にして書く活動を重視していきたいと考えています。

一方で、話すこと・聞くことに関する問題や、文中で漢字を正しく使う問題は全国平均を上回りました。これは、基礎的な言語事項の確実な定着に向けて家庭学習と連携を図ったことや、対話的な学習において自分の思いや考えを正確に伝え合う活動を重視してきた成果と捉えています。今後も読書活動を推進して読解力の向上に努めるとともに、AIドリル等を活用した家庭学習の充実を図っていききたいと考えています。



○ 中学校について

県平均、全国平均を上回る結果となりました。その要因として、茨城県全体で課題と捉えている問題の正答率が県平均を大きく上回ったことが挙げられます。具体的には、話すことや書くことに関する問題、行書の特徴を答える問題です。どの問題を解くにも、基礎的・基本的な知識及び技能が定着していることが前提となります。その一例として、自分の考えを相手に分かりやすく伝えるように表現を工夫して話す、考えの根拠となる情報を引用する際には「」(かぎかっこ)を使う、行書は筆順が変わることがあるといった知識及び技能が挙げられます。各校における日頃の授業で、このようなポイントを授業者が明確に押さえて指導を行っている成果と捉えています。

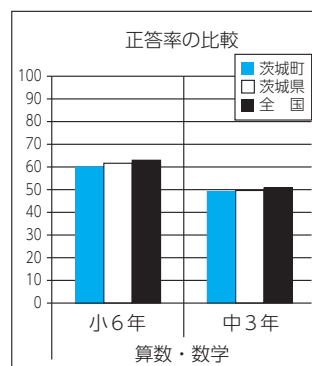
一方で、読むことに関する問題に課題が見られました。物語文の叙述に用いられた比喻などの表現技法を適切に選択する問題や、物語の展開に沿って登場人物の行動や心情を並び替える問題の正答率は、県平均や全国平均を下回りました。読書活動の推進はもちろんですが、今後も読むことの学習過程を重視しながら、読解力や自分の考えを形成したりする力をさらに高めていききたいと考えています。

算数・数学(受験者数:小学校233名 中学校262名)

○ 小学校について

県平均、全国平均をともにやや下回る結果となりました。中でも、概数を用いて答えの見通しを立てることや、ジュースに含まれる果汁のように数量が変わっても割合は変化しないことに関する理解に大きな課題が見られました。概数のよさを活かして買い物をしたり、量が減っても同じ味のジュースを飲んだりした経験が多くの児童にあるはずですが、どちらも日常生活に深く関わる内容だからこそ、日頃の授業における学習問題を工夫して日常生活に関連させ、答えを導き出すことだけに終始しない学習の展開を重視したいと考えています。これらによって、児童が問題解決への意欲を喚起されるとともに、より主体的に学習へ取り組むことが期待できるためです。

また、円グラフから必要な情報を読み取る問題は高い正答率を示したものの、グラフの基となったデータを適切に活用する問題は低い正答率でした。様々なグラフの特徴を正しく理解した上で、身の回りの事象をデータに基づいて判断する統計的な問題解決の方法で考察することを、より一層重視していきたいと考えています。



○ 中学校について

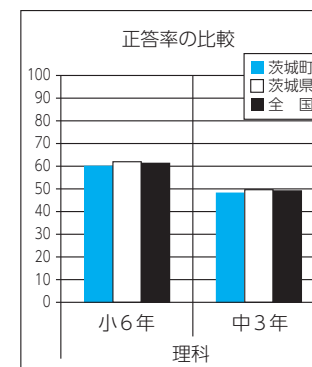
県平均、全国平均をともにやや下回る結果となりました。中でも、素因数分解や連立二元一次方程式を解くことに大きな課題が見られました。さらに、「反例(「AならばBである」という命題において、Aは満たすがBは満たさない例)」や一次関数における「変化の割合」の意味を理解することについて不十分であることが明らかになりました。これらは全て、基礎的・基本的な知識及び技能に関連する内容といえます。茨城県の課題でもある「問題を正しく読み取る力」や「自分の考えを論理的に記述する力」の土台となる事項となるため、今後も反復によって確実な定着を目指します。

一方で、目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして事柄が成り立つ理由を説明する問題や、結論が成り立つための前提を考えながら新たな事柄を見出して説明する問題は高い正答率を示しました。これは、各校において他者に分かりやすく説明する活動を重視して取り組んできた成果と捉えています。今後も「学び合い」の充実を図りながら、思考力・判断力・表現力等を育てていきます。

理科(受験者数:小学校234名 中学校263名) ※平成30年度以来の実施

○ 小学校について

県平均、全国平均とほぼ同じ結果でした。化学の領域に関する問題の正答率が高い一方で、物理や地学の領域に関する問題の正答率が低いという傾向が見られました。また、理科の中心的要素となる実験や観察における基礎的な知識及び技能は十分に定着しているものの、実験や観察を行った後の考察に課題が見られました。今後も、実験や観察の結果を基に考察する活動を一層重視して取り組んでいきます。



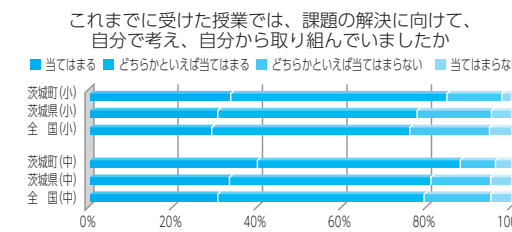
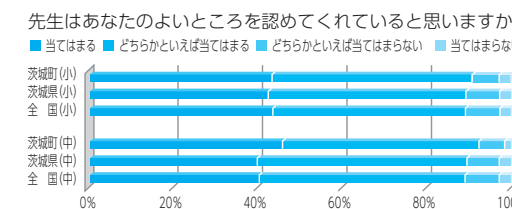
○ 中学校について

県平均、全国平均をともにやや下回る結果でした。生物の領域に関する問題の正答率が高い一方で、化学や地学の領域に関する問題の正答率が低いという傾向が見られました。また、根拠や理由を説明するなど記述式の問題は高い正答率を示しました。これは、各校において他者への説明を柱とする表現力を高めてきた成果と捉えております。今後も、小グループでの「学び合い」を通して「深い学び」を展開していきます。

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

全国平均を上回った主な質問項目

小中学生ともに、高い規範意識をもって生活していることが分かりました。また、「先生はあなたのよいところを認めている」と思っている児童生徒の割合が非常に高いことから、教職員と児童生徒の間に確かな信頼関係が構築されていると感じます。さらに、「課題解決に向けて自分で考え、取り組んでいた」と回答した割合が非常に高いことから、茨城町の児童生徒が主体的に学習に取り組んでいることが分かります。そして、「ICT機器を使うのは勉強の役に立つ」と回答した児童生徒も多く、授業におけるICT活用が全校で進んでいる茨城町らしい結果となりました。



全国平均を下回った主な質問項目

小中学校ともに、「自分にはよいところがあると思う」という質問項目が全国平均を下回りました。自己肯定感、自分自身を大切にすることで欠かせません。茨城町の小中学校では、児童生徒を前面に出して行事を運営するなど、自己有用感を高める様々な取組を行っています。自分のよさに気付くとともに、自分の周りの人たちのよさに気付く子どもたちを育てていきます。

また、小学校では「読書が好き」と回答した割合が全国平均を下回りました。長いコロナ禍でゲーム等のメディア時間は非常に長くなっています。茨城町では、朝の時間などを活用した読書活動を推進しています。読書を通して「豊かな心の育成」にもつなげたいと考えています。

